

優秀賞

「沼子の人生」

作・日高真理子

〈あらすじ〉

20年間2階の自室に引きこもる沼子（48）。毎日の食事をドアの前に置くのは母芳江（71）だ。

に願っていただろう。そして引きこもりの自分が部屋から出てきたらどんなにか喜んだだろう……母の遺体を前に悲しみが溢れる沼子だった。

〈登場人物〉

陣内 沼子（48） 引きこもりの女

ある日、食事が無く沼子は階下に降りる。そこへウィーン在住の甥、智樹（25）とカタリナ（25）が現れ芳江の死を告げる。芳江は夫妻と食事中、心臓発作を起こしたのだ。だが沼子は平然とカップ麺を食べ智樹達は戸惑う。葬儀屋とのやり取りで、沼子は姉の玲子（智樹の母）への憎悪を露わにする。

吉永 智樹（25） 沼子の甥

カタリナ（25） 智樹の妻

カタリナと智樹はハネムーンの予定を変更し、沼子を気遣う。悪態を尽きながらも僅かに心が和らぐ沼子。無意識に母を偲ぶ歌を口ずさむ。

陣内 芳江（71） 沼子の母

そこへ玲子（49）から電話がかかる。昔、恋人の悟を奪われた恨みをぶつける沼子。悟は今、玲子の夫だ。仲直りしようと言う玲子を拒絶し、電話を切る。母は姉妹の仲直りをどんな

吉永 怜子（49） 沼子の姉

葬儀屋（36）

ドアがゆっくり開く音。

智樹「智樹だよ！ 甥の智樹。忘れたの？」

芳江「結婚おめでとう」

ああ、最後に会った時、僕まだ子どもだった

智樹「有難う、おばあちゃん」

沼子「腹減った……今日はなんで飯置いてな

から……一家でウィーンに行つて、もう2

カタリナ「アエテ、ウレシイデス」

いんだ……」

0年になります」

芳江「（涙声）まあ、遠いウィーンからよく……

階段をゆっくり降りる音。

沼子「……ああ。玲子のところの……」

……本当に……智樹君から、来月会いに行き

妻のカタリナです。カタリナ、この人はマ

うつて」

沼子「引きこもりでも腹は減るんだよ……

マの妹」

智樹「困ったの？」

くっそお……何やってんだ、あのババア」

カタリナ「カタリナデス。ハジメマシテ」

芳江「え？ まさか。嬉しすぎて……ええと、

沼子「……」

明日は？ どんな予定？」

冷蔵庫や戸棚を開ける音。

智樹「おばさん、実は……（咳払い）落ち着

智樹「別府に行きます。アルゲリツチ音楽祭

カップ麺の包装を破り、湯を注ぐ音。

いて聞いてね。おばあちゃんがさつき」

に」

ドアが開き、二人の足音。

沼子「……かあさんが？」

カタリナ「タノシミ、トテモ」

智樹「アッ！」

を起こして……」

に」

沼子「……あ」

芳江「そう……一家で音楽家ね。あなたのパ

カタリナ「オウ！ ……ク、クサイ」

（回想）

パも、ママも……」

智樹「……沼子おばさん？」

グラスが合わさる音。

カタリナ「ママモ？」

沼子「あんた……だれ？」

智樹「ママも昔、音楽をやっていて、パパの

教え子だったんだよ。あ、沼子おばさんも一緒に習ってたんでしよう？」

芳江「……え？ ええ」

智樹「そうだ、食事が終わったらおばあちゃんちに行つていい？」

芳江「えっ」

智樹「沼子おばさんにも是非会つて挨拶したいし」

芳江「智樹君、沼子のこと……何か聞いてる？」

智樹「何か？」

芳江「……パパとママから」

智樹「ううん。ね、パパとママに、テレビ電話して驚かせようよ。沼子おばさんも一緒に」

カタリナ「ビツクリ、スルネ！」

フォーク、ナイフの落ちる音。

智樹「……どうしたの？ おばあちゃん」

芳江「……ウウツ……」

智樹「苦しいの？ しっかりして！」

カタリナ「オバアチャン！」

智樹「（大声で）誰か！ 救急車！」

救急車のサイレン音。

（回想終わり）

沼子「それでご飯が置いてないのか」

智樹「ご飯のことなんか言ってる場合じゃ……」

……おばあちゃん、死んだんだよ！」

カタリナ「ウツ（泣き出す）ウツ……ウウウ」

智樹「おばさん、最初から気になってたんだけど……何なんだよ？ その恰好」

カタリナ「ダラシナイ、イエモキタナイ」

智樹「おばあちゃん……家に来て欲しくなかつたんだ」

沼子「3分経った」

箸を割り、麺をすすする音。

智樹「飯なんか食ってる場合じゃないでしょう！」

う！」

沼子「（モグモグさせながら）飯じゃなくて

麺。あんた日本語忘れたの」

カタリナ「トモキ、ソレヨリ、フトン」

智樹「ああ、おばあちゃんの遺体がここに戻って来るから布団を敷かないと」

麺をすすする音。

智樹「おばさん！ 布団！」

ストレッチャーの車輪音。

葬儀屋「それではご遺体をお運びしますので。

男性の方……はい、お宅様。ご協力頂けます
でしょうか？」

智樹「あのう……布団が……コタツ布団しか
なくて」

葬儀屋「かまいません。頭の方を……そう、そ
うです……はい、一緒に」

智樹「……ヨイツショ！」

畳の上を歩く摺り足の音。

葬儀屋「では、葬儀の日程など、今後の打ち

合わせを致しましょう」

智樹「……おばさん？」

沼子「……」

葬儀屋「お孫さん……とお話を進めてよろし
いでしょようか？」

智樹「いや、僕らは……日本のお葬式はよく
わからないし」

葬儀屋「はあ」

智樹「パパとママが来れば……でも、直行便
が取れなかったらしくて」

沼子「（呟く）玲子」

智樹「着くのは明後日になるって」

沼子「（呟く）明後日……じゃあ明日」

智樹「え？」

沼子「（ドスの効いた声で）明日、火葬しろっ
て言ってたんだよ！」

智樹「明日って、そんな」

りんの鳴る音。

カタリナ「オバアチャン……ネテルミタイ」

智樹「そうだね……おばさん、落ちついた？」

沼子「（呟く）最初っから落ちついてるよ」

智樹「僕ら、そろそろ……カタリナ、何？ ……

……ええっ！ここに泊まる？」

カタリナ「ハイ」

智樹「ホテルは？」

カタリナ「キャンセルシマシヨ」

智樹「ど、どうして」

カタリナ「ダツテ……」

沼子「……勝手にしろ」

カタリナ「ヌマコ、マツテ！」

階段を上がっていく音。

智樹「クサイって言ってたじゃないか」

カタリナ「ナレマシタ」

智樹「布団、探さなきゃ」

カタリナ「ヌマコ、イエゴトカソウ、スルカ

モ」

智樹「怖いこと言うなよ！」

カタリナ「ヌマコ、ナゼママ、キラウ？」

智樹「わからない……昔、何かあったのかな」

缶ビールのプルタブを引く音。

ごくごく飲む。

沼子「智樹の目……玲子そっくりだ……いつ

も笑ってるような人懐こい目……誰もがあれにたぶらかされるんだ……悟さんも……

チクショウ……あれからあたしの人生は何もかもうまくいかない……」

ドアを開ける音。

沼子「朝か……腹減った……」

階段を降りる音。

智樹「（大声で）冗談じゃないよ！ わざ

わざ音楽祭に合わせたハネムーンにしたんじゃないか！ 我儘言うなよ！」

カタリナ「ワガママ、ジャナイ！」

智樹「僕一人でも行く」

カタリナ「オウ！ トモキツメタイ！ ネ！」

沼子「（呟く）喧嘩か……もっとやれ」

智樹「おばさんのせいだよ！ カタリナがお

葬式までここにいて言うんだ」

沼子「え」

カタリナ「ヌマコ、キイテクダサイ。オバアチ

ャン、ヌマコヲアイシテイタ、トツテモ」

沼子「……うるさい」

カタリナ「サイゴノコトバ、ヌマコ、ヌマコ」

沼子「やめろ」

カタリナ「カワイソウニ……ワタシ、ヌマコノ

ソバニイマス」

沼子「てめえ、いい子ぶりやがって」

智樹「おばさん！」

沼子「お前ら、とつとと失せる！」

カタリナ「（泣き声）ココニイマス！」

智樹「……カタリナ、もう……わかったよ」

カタリナ「（泣きながら）トモキ」

智樹「やつぱり君は僕が好きになった人だ」

沼子「……なんだ、もう喧嘩終わりか」

智樹「終わりです……僕たちおばさんと一緒に

におばあちゃんを見送るよ」

智樹「何だと？」

智樹「わかるんだ……おばさんは悪い人じゃ

ない」

カタリナ「ヌマコノメ、トモキノメ、ニテル」

沼子「……」

智樹「あの、おばさん、僕たちシャワー浴びて

来ていい？」

カタリナ「バスルーム、キタナイ」

智樹「……二人で掃除しながら浴びてきます」

古いピアノの蓋を開く音。

たどたどしい音は、徐々に「我が母の教

えたまいし歌」（*）になる。

合わせて口ずさむ沼子。

突然、電話の呼び出し音、鳴り続ける。

受話器を取る音。

玲子（電話の声、以下同じ）「もしもし？ 陣

内さんのお宅ですか？ ……沼子？」

沼子「……玲子」

玲子「沼子……心細いでしょ？ 気を確かに

持ってね、私達すぐ」

沼子「（さえぎつて）あんた……あの時、あた

しが悟さんと付き合ってるの知ってて誘惑

しただろ？」

玲子「何いきなり、そんな昔のこと」

沼子「答えろよ」

玲子「今する話じゃないでしょ」

沼子「いいから答えろ」

玲子「怖い声」

沼子「答えろよ！」

玲子「もちろん知ってた……あなたには他に

本命がいて、二股かけてるって嘘ついたわ」

沼子「……」

玲子「どうしても悟さんが欲しかったの」

沼子「……あんたは誰でも自分の味方につけ

る……悟さんも……かあさんも」

玲子「ごめんなさい」

沼子「……白々しい」

玲子「……ねえ……あたし達、子どもの頃み

たいに戻れないかしら？ ……そうだ、よ

くお芝居ごっこしてたじゃない。また、あ

んな風に仲良く……戻れない？」

玲子「無理」

受話器を乱暴に置く音。

沼子「……でもあんたの息子は悪くない……

あんたに似ないで……あんたの嫁も」

襖を開ける音。

畳を歩く音。

沼子「かあさん……きつとこんな風に言うん

だ……（母の口調で）玲子ちゃん、おかえ

り！（玲子の口調で）おかあさん、ごめん

ね、ずっと帰って来れなくて……沼子は？

（母の口調で）それが実は……ずっと引き

こもってただけど、今日部屋から出てき

たの。ついによ。20年ぶり。もう、嬉し

くて嬉しくて……あんたたちが仲直りし

てくれたら、かあさん、もう死んでもいい

……なんてね……アハハハ……アハハ

ハハ……（だんだん泣き声になる）何やっ

てんだよ！ 早く飯作れよ！ ……どう

して寝てんだよ……馬鹿野郎！」

《終》

* 「我が母の教えたまいし歌」

（ドヴォルザーク）